キャラクター名: スロール・ウルフハンマー

プレイヤー名:

メインクラス	ウォーリア	**Lv.1:**		**レベル**	1
サポートクラス	サモナー	**Lv.1:**	サモナー	**性別**	男
称号クラス				**年齢**	27
種族	ドゥアン			**境遇**	大成功
出自（効果）	英雄			**目標**	無目的

	筋力	**器用**	**敏捷**	**知力**	**感知**	**精神**	**幸運**
基本値	12	8	8	10	7	10	7
ボーナス	4	2	2	3	2	3	2
クラス修正	1	1	1	1	0	1	1
他修正							
能力値	5	3	3	4	2	4	3

HP	38
MP	35
フェイト	4

装備品		**射程**	**命中**	**攻撃**	**回避**	**物防**	**魔防**	**行動**	**移動**
右手	グレートアックス	至近	-2	11	0	0	0	-2	0
左手									
頭部	ハット					1			
胴部	レザージャケット					4			-1
補助	マント					1			
装身具									
能力値			3	0	3	0	4	5	10
スキル	ウェポンルーラー		2						
その他									
総計(右)			3	11	3	6	4	3	9 m
総計(左)									
総計(両)									
ダイス数			2 d	2 d	2 d				

	能力値	スキル	その他	合計	ダイス数
トラップ探知	2			2	+ 3 d
トラップ解除	3			3	+ 2 d
危険感知	2			2	+ 2 d
エネミー識別	4			4	+ 2 d
アイテム鑑定	4			4	+ 2 d
魔術判定	4			4	+ 2 d
呪歌判定					+ d
錬金術判定					+ d

所持品	
冒険者セット	
HPポーション	
MPポーション	

現在重量： 7		
最大重量： 12	所持金： 0	預金・借金：

スキル名	**SL**	**コスト**	**タイミング**	**射程**	**対象**	**判定**	**制限**	**メモ**
タフネス	★	-	パッシヴ	-	-	-		
効果：	有角族、作成時に最大HP+5							
バッシュ	1	4	メジャー	武器	単体	命中		
効果：	武器攻撃を行う。ダメージロールに+[SLd]							
ウェポンルーラー	1	-	パッシブ	-	自身	-		
効果：	命中判定+2							
ボルテクスアタック	1	-	DR直後	-	自身	自動成功	-	
効果：	ダメー ジに+［ＣＬ×10］							
サモン・フェンリル	1	8	ﾒｼﾞｬｰ	20	範囲(選択)	魔術判定		
効果：	無属性魔法ﾀﾞﾒｰｼﾞ。ﾀﾞﾒｰｼﾞﾛｰﾙ2D。威圧を付与。ｸﾘﾃｨｶﾙはﾀﾞｲｽﾛｰﾙ増加で恐怖を付与。							
フォースブリンガー	1		パッシブ	-	自身	-		
効果：	無属性ﾀﾞﾒｰｼﾞに+［SL×4］							
オピニオン	1	-	パッシブ	-	自身	-		
効果：	精神判定に+1D							
	1							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

・出自：英雄
オウガにとっては、強さこそが全てだった。
君の両親は多くの冒険者を葬り、オウガたちの中でも一目置かれるような存在であり、君にとって両親は間違いなく英雄だった。
しかし二十年前に侵略が始まり、十五年前、最前線であるネビロス国が落された時。
次に侵略者と戦うことになったのは妖魔たちだった。
君の両親もまた侵略者との戦いに赴き、侵略者から種族を守ろうと奮戦した。
しかし、妖魔たちは侵略者たちの圧倒的な数によって瞬く間に殲滅されていく。
君の両親は残った仲間を守ろうと戦っていたが追い詰められる。君は傷ついた両親を守ろうといつの間にか両親の前に立ち、侵略者と向き合っていた。
しかし両親の敵わなかった相手になすすべがあるはずもなく、命を落しそうになる。
だがそこに、一人のヒューリンが現れ君たち家族や仲間の窮地を救ったのだ。
「くくく、すばらしい輝きだ。親を守ろうと立ち向かう子供の秘める輝きは、これほどに強いものなのか！」
その人間は巨大な杭打ち器のような武器を持ち、哄笑を上げて侵略者を蹂躙していく。
地形すら変わる凄まじい破壊を目にした君は、同行していた別の人間たちに仲間と共に保護される事となった。

・境遇：大成功
君は両親と共に、住む場所を追われた妖魔のためにあてがわれた土地で暮らしていた。
既に世界は、種族の垣根を越えて協力しなければならない窮地に陥っており、生き残った妖魔たちもまた、かつては敵対していた者たちと手を結び共に戦っている。
だが、君の両親はまるで協力しようとはせず、くさっていた。
両親は人間に助けられたことで誇りも矜持も失ってしまったのだろう。
君はそんな、かつて憧れていた面影すらなくなりつつある両親に反発し、家を離れ、神の子らが多く住む町へとやってきた。
妖魔である君への風当たりはけして弱くはなかったが、その中で生活し始めた君は、結果的に一定の理解と立場を得ることになる。